

本田創造著

アメリカ黒人の歴史

新版



岩波新書

165

3

D7

261238



日文 701486843

本田創造 著

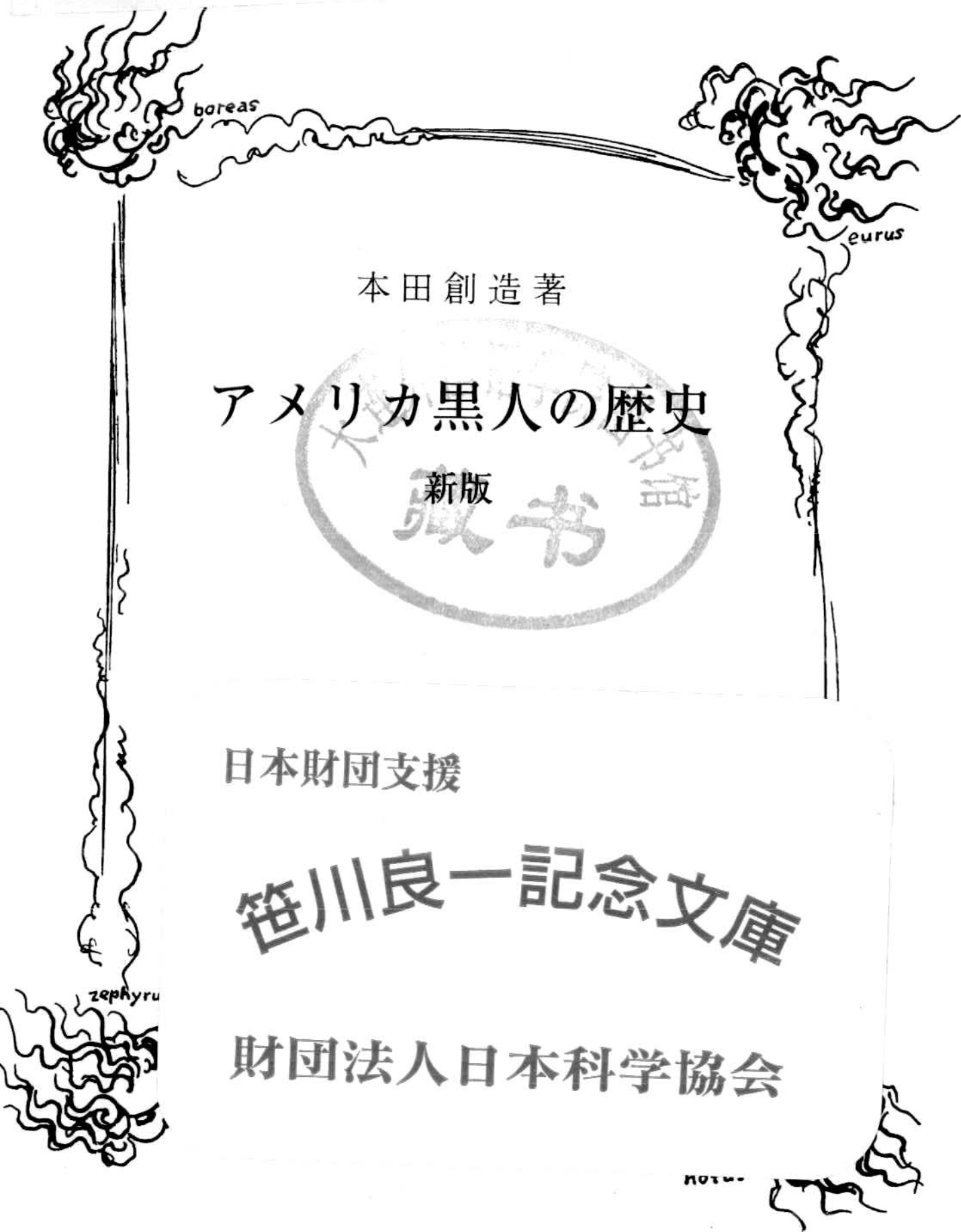
アメリカ黒人の歴史

新版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会



本田創造

1924年大阪に生まれる

1949年東京大学経済学部卒業

現在——橋大学名誉教授，桜美林大学名誉教授

専攻——アメリカ社会・経済史

著書——「アメリカ南部奴隷制社会の経済構造」(岩波書店)

「私は黒人奴隷だった」(岩波ジュニア新書)

「アメリカ社会と黒人」(太月書店)

「南北戦争・再建の時代」(創元社)

「アメリカ資本主義の成立と展開」(共編著，岩波書店)

「アメリカ社会史の世界」(編著，三省堂)

訳書——K. C. ホイア「リンカン」(共訳，岩波新書)

ソヴェト科学アカデミー「世界史」(共訳，東京図書)

ジョン・ホープ・フランクリン「人種と歴史」(監訳，岩波書店)

メアリー・ベス・ノートン他「アメリカの歴史」(監修，三省堂)



アメリカ黒人の歴史 新版

岩波新書(新赤版)165

1991年3月20日 第1刷発行 ©

1998年5月15日 第19刷発行

著者 ほんだ そうぞう
本田創造

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・三陽社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

¥660-

ISBN4-00-430165-3

Printed in Japan

は し が き

本書の旧版が出たのは、一九六四年の夏である。爾来、四半世紀余にわたって、それは当初の予想をはるかに超えた沢山の読者を得てきた。その間、友人や知人から、直接、数々の貴重な意見を聞くことができたほか、熱心な見知らぬ読者からも、質問や感想をしたためた幾通かの手紙を頂戴した。

なかには、被差別部落の中学生、もう還暦をすぎたという在日朝鮮人、黒人と結婚してアメリカに住む日本人女性などの読者の手紙も混じっていたが、大半は大学に籍をおく学生や、高校を終えて働きながら学ぶ若い読者からのものであった。また、高校生用の世界史や社会科の教科書、参考書類に、書物のごく一部分が資料として転載されたりもした。著者として、これらにまさる喜びはない。

私は、今も、大学で学生たちと一緒にアメリカ合衆国の歴史、とりわけ黒人史の勉強をつづけているが、授業などで、つい相手もよく承知しているものと錯覚して、「あのワシントン大

行進のとき……」とか、「あのケネディ大統領が暗殺されたのは……」などといった言葉が、無意識のうちに口をついて出る。そんなとき、学生たちの顔にちらっと浮かぶ困惑した表情に、今度は私のほうが戸惑って、話の展開を一時中断し、その事柄の説明から始め直さなければならぬことが、しばしばある。考えてみれば当り前のことだが、私が「きょうの重大ニュース」として身近に感じとったこのような出来事が起こったとき、そして本書の旧版が出版されたときにも、これらの学生たちは、まだこの世に生まれてさえいなかったのである。

アメリカ史研究者として、私がそれとともに同時代を生きてきた戦後のアメリカ黒人史上のさまざまな出来事は、かれらと同じ世代の若い読者には、完全に「過去の歴史的事件」になってしまっている。しかし、それについては、旧版では殆ど語られていない。若い世代の読者にとってのこれらの出来事は、それをそのときどきの個々の重要な時事問題として皮膚感覚的に受けとめてきた私としても、そろそろ歴史研究の対象として相対化し、その全体像について考察しなければならぬ時期にきていることを、だいぶ以前から痛感していた。私自身の個人的事情で延び延びになっていたこの課題に、曲りなりにもこたえようとして、なんとか出来上がったのが、今回の新版である。

本書においては、旧版のときには歴史研究としてはまだ叙述し得なかった公民権闘争を中心

にした黒人解放運動と、その後の黒人の状態の変化にかんする三つの章を書き加えらるとともに、プロローグもここにちの視点から新たに書き改めた。しかし、それ以前の歴史部分は、その後の内外の研究史を踏まえて、適宜、補筆・削除して訂正を行なったものの、その内容については、私の立場＝歴史認識に基本的な変更がないため、主として文体と形式の統一を図ることに重点をおいた。

新しい世代の歴史研究者の手で、新しい時代に適応した、新しいアメリカ黒人の歴史が、近い将来、一日も早く書かれることによって、本書が無用のものとなる日が到来することを願いつつ、それまでの橋渡しとして本書を作成したというのが、今の私の偽らざる気持である。それが、学問研究の継承、発展というものだろう。

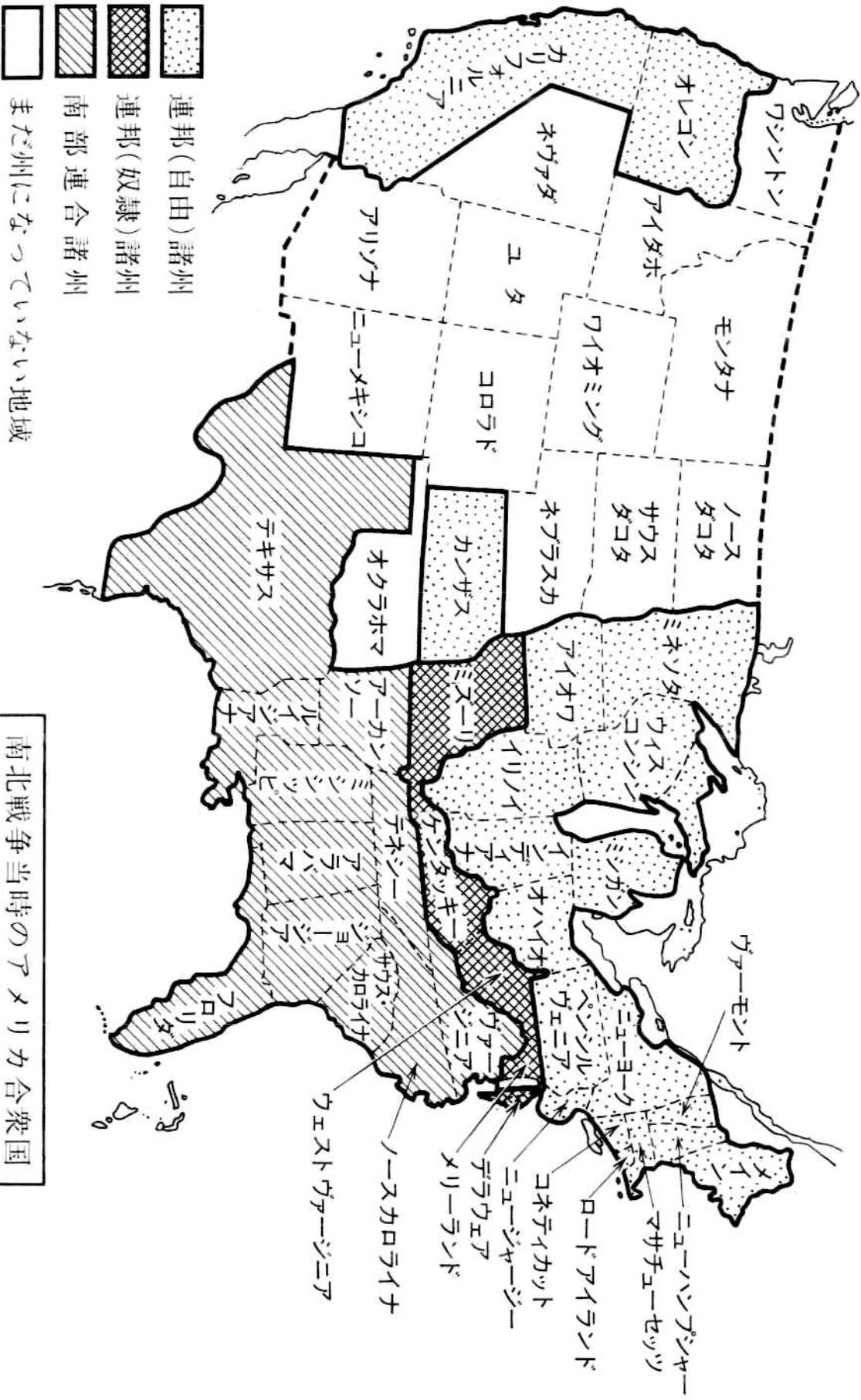
また、これとは次元を異にするが、一九八六年の中曽根首相(当時)発言「アメリカには黒人とかプエルトリコとか、メキシカンとか、そういうのが相当あって、平均的にみたら(インテリジェンスが)非常に低い。アメリカでは今でも黒人は字を知らないのが随分いる」、その二年後の渡辺自民党政調会長(当時)発言「アメリカには黒人だとかがいっぱいいるから、あすから破産だといわれてもアツケラカンのカーだ」、そして、またもや二年たった一九九〇年の梶山法相(当時)発言「悪貨が良貨を駆逐するというか、アメリカにクロ(黒人)が入ってシロ(白人)

が追い出される、というように（新宿が）混住地になっている」など、わが国の一部政治家のあいだにみられる「インテリジェンス」の欠如というより、破廉恥きわまりない言辞に象徴的に示された差別意識は、決してかれらだけのものとしてすまされるべきではない。それは、また、私たち、ひとりひとりが、私たち自身の問題として真剣に考えなければならぬ事柄である。こうした中で、本書が多少とも積極的役割を果すことができれば幸いである。

この程度の書物でも、出来上がるまでには多くの方々のお力添えを得た。なかでも、一橋大学助教授の辻内鏡人氏と同大学博士課程大学院学生の大森一輝氏には、ひとかたならぬお世話になった。とくに辻内氏には、在外研究中の貴重な時間の多くを私のために割いていただいた。両氏の惜しめない協力がなかったら、本書の刊行はまだもっと先に延びてしまっていたであろう。また、岩波新書編集部の富田武子氏は、私の勝手な注文や我儘を、すべて辛抱強くきき入られて下さった。これらの方々のご厚意に、心からお礼申し上げます。

一九九一年一月二日

本田 創造



南北戦争当時のアメリカ合衆国

目次

はしがき

プロローグ——アメリカ黒人とは…………… 1

ガス室に消えた黒人青年の訴え／ワシントン大行進二五
周年記念集会／アメリカ黒人とは

1 植民地時代の奴隷制度…………… 17

ジェームズタウン／最初の黒人奴隷／奴隷貿易／「中間
航路」の悲劇／原住インディアンと白人年期奉公人／黒
人奴隷制度の成立

2 独立革命…………… 41

クリスパス・アタックス／独立宣言と合衆国憲法／反奴
隷制感情の高まりと黒人兵士の活躍／奴隷制度廃止への
動き

3	南部の綿花王国……………	59
---	--------------	----

プランテーション奴隷制度／綿花は王者／二つの南部／
夜明けから日没まで

4	奴隷制廃止運動……………	75
---	--------------	----

アボリシヨニズム／自由黒人と植民運動／フレデリッ
ク・ダグラス／地下鉄道と奴隷暴動／奴隷制廃止運動の
歴史的意義

5	南北戦争……………	101
---	-----------	-----

ドレッド・スコット判決／分かれた家は立っていること
ができない／南部諸州の分離から内戦勃発へ／奴隷解放
宣言／戦争と黒人

6	南部の再建と黒人差別制度……………	125
---	-------------------	-----

リコンストラクション／転換と挫折／黒人差別法の成立

7	近代黒人解放運動……………	145
---	---------------	-----

8	公民権闘争の開幕……………	167
	ジム・クロウ／タスキーギ運動とナイヤガラ運動／全国 黒人向上協会と全国都市同盟／ガーヴェイ運動	
9	黒人革命……………	187
	ランチ・カウンターへの坐り込み運動／自由のための乗 車運動／ワシントン大行進／一九六四年公民権法／南部 白人の反動攻勢と「長く暑い夏」の到来	
10	アメリカ黒人の現在……………	231
	政治参加の進展／教育の統合化と生活環境／経済状態	
	アメリカ黒人史略年表	

プロローグ——アメリカ黒人とは

黒いアフリカの海岸からひっぺがされて
僕はきたのだ
「自由の母国」をつくるために

自由の？

おお、アメリカを再びアメリカにしよう
いまだ一度もなったことはないのだが
だが、必ずやなるにちがいない国土にしよう
「あらゆる」人が自由な国土に
僕のものと言える国土に
貧乏人の、インディアンの、黒ん坊の、「僕」の——

おお、そうだ
僕はかくさず言おう
アメリカはこの僕にアメリカであったことがない
けれど、僕はここに誓うのだ
アメリカはそうなる！
永生の種子
その夢は僕の心臓ふかくよこたわる

ラングストン・ヒューズ「アメリカを再び
アメリカにしよう」(木島始訳)より

ガス室に消えた
黒人青年の訴え

一九八七年五月二〇日、午前零時一分——ミシシッピ州サンフラワー郡パークマンにある州立刑務所内のガス室で、リーク郡高等裁判所の判決により、二六歳の一人の青年の死刑が執行された。刑の開始から五分後の零時六分、彼の心臓は完全に機能を停止した。

処刑されたこの若者の名前は、エドワード・アール・ジョンソンといい、アメリカ合衆国の中で、今なお人種差別と偏見が最も根強く残っている深南部ディープ・サウスの一州、ミシシッピ育ちの黒人だった。

「事件」は、それより八年前にさかのぼる。一九七九年六月、リーク郡ウォルナットグローヴで六〇歳の白人女性が何者かに襲われ、救助に駆けつけた白人保安官が殺された。ジョンソンが逮捕されたのは、この保安官殺害容疑による。現場から走り去ったのと同じ型の車を彼が所有していたというのが、唯一の逮捕理由だった。ジョンソンは面通しを受けたが、以前から顔見知りだった被害者の女性は、彼女を襲ったのはジョンソンではないと、はっきりと証言した。それにもかかわらず、いったん釈放されたジョンソンが、物的証拠はなにひとつないまま再逮捕された。警察に連行された彼は、あらかじめ用意されていた虚偽の自白調書に、むりや

り署名させられた。この間の事情について、ジョンソン自身はこう語っている。

日曜日の夕方、保安官と捜査官の二人に、人気のない道端に車を止めさせられた。「言
うとおりに答えなければ殺す」と脅かされて、まだ一八歳だったぼくは、どうしていいか、
わからなかった。ただ、途方にくれていた。……助けってくれる人は誰もいなかった。二人
は白人で、ぼくは黒人。かれらの言うとおりにしなければ、殺されるのは間違いなかった。
……警察で、かれらは署名を強要した。「内容は気にするな。ともかく署名しろ」と。ぼ
くは、とても怖かったので署名した。

刑務所長を別にして、看守も服役者の誰も、ジョンソンが真犯人だとは思っていなかった。
その所長も、七年以上にわたって、無実を主張しながら刑務所生活を送った彼の服役ぶりにつ
いて、「ジョンソンは模範囚だった」と言っている。

弁護団をとおして、州最高裁判所や連邦地方裁判所へ提出した再審や刑の執行停止の申請は
却下され、また州知事の恩赦も得られず、「心から神を信頼すれば、神はかならず疑いを晴ら
してくださる」と祈りつづけたジョンソンの願いも空しく、彼の死刑は予定どおり執行された。
処刑後の会見で質問に応じた刑務所長は、ジョンソンの最後の言葉として、「ぼくは無実だ。
誰も恨んではない。今まで力になってくれた人びとに感謝する。」そして、もう一度「ぼく

は無実だ！」と言葉静かに、はつきりとつけ加えたと答えている。

「こんにちの文明社会で、こんなことが許されて、はたして、いいのだろうか！」処刑まぎわまでジョンソンを担当した白人教誨師の言葉である。

合衆国で黒人が白人を殺害したとき死刑になる割合は、白人が黒人を殺害したときの四倍以上にのぼる。しかし、ジョンソンの場合、彼が真犯人ではなく、冤罪であることにはほぼ間違いない。さきの被害者の女性の証言だけでなく、処刑後、弁護団は彼女が襲われた日のその同じ時刻に、ジョンソンと一緒にビリヤード場にいたという黒人女性を見つけだしたが、この女性が裁判所で彼のアリバイを証言しようとしたところ、白人の係官に「余計なことはするな」と阻止された。

だが、この「事件」のもついつそう大きな意味は、彼の処刑がたんなる冤罪ではないということである。ジョンソン自身がいみじくも語っているように、彼の有罪(死刑判決)は、「裁判以前に決っていた」のだ。それは、ミシシッピ州という「閉ざされた社会」で、容疑者が黒人、殺されたのが白人保安官、そして裁いたのが白人権力という人種力学が必然的にもたらした結果である。しかし、それは同時に、ミシシッピ州という特定の一州にかぎらず、WASP(アングロサクソン系のプロテスタントの白人)を中心とする多人種・多民族国家の合衆国に、こ

んにち、なお牢固として存在している白人優越^{レイシズム}「黒人蔑視の人種主義」の多様な構図の一側面を最も劇的に示したものといえる。

ワシントン大行進 二五周年記念集会

ジョンソンの処刑後、一年三ヵ月を経た一九八八年八月二七日、首都ワシントンで、それより二五年前の「ワシントン大行進」(一九六三年八月二八日)とその象徴的人物だったマーティン・ルーサー・キング牧師を記念する大衆集会が開かれた。

この集会は、秋の大統領選挙を間近に控え、すでに民主、共和両党の大統領候補も決つていたこともあつて選挙戦がらみの様相を呈し、午前中に行なわれたワシントン記念塔からリンカン記念堂までの行進には、指名こそ得られなかったが、民主党全国大会で「黒い大旋風」を巻き起こしたジェシー・ジャクソン牧師や、同党の大統領候補でマサチューセッツ州知事のマイケル・デュカキスが、キング牧師夫人のコレッタ・スコット、息子のマーティン・ルーサー・キング三世、アトランタ市長のアンドルー・ヤングらと一緒に腕組みをして参加した。主催者側は共和党候補のジョージ・ブッシュ副大統領にも招待状を出していたが、折からテキサス州を遊説中だった彼は、「黒人その他のマイノリティが獲得した成果」を強調した簡単なメッセージを寄せただけで、直接、この集会に姿を見せることはなかった。

演説の中で、デュカキスは、「この集りは、公民権運動の二五年間の成果を祝う行進でもなければ集会でもない。この世からすべての黒人差別、反ユダヤ主義などの人種差別がなくなるまで、続けなければならない行進であり集会である」と述べ、またキング牧師のもとで公民権運動を闘ってきたジャクソンは、「キング牧師の掲げた夢を夢に終らせてはならない。黒人は、まだ賃金その他さまざまな人種差別を受けており、公民権要求の運動は、いっそう強化されなければならぬ」と訴えた。

コレッタ・スコット・キングは、「われわれには、依然として人種主義と差別の癌から国民を解放すべき夢がある。すべての人が愛と配慮につつまれて、兄弟姉妹として平等に暮らす夢がある」と、二五年前にキング牧師が、

私には夢がある。いつの日か、この国は立ち上がり、《われわれは、自明の真理として、すべての人は平等につくられ……》という（独立宣言の中に示された）この国の信条の真意に生きぬくときがくるであろう。

私には夢がある。いつの日かジョージア州の赤土の丘の上で、かつての奴隷の子どもたちと、かつての奴隷主の子どもたちとが、一緒に腰を下し、兄弟として同じテーブルにくときがくるであろう。